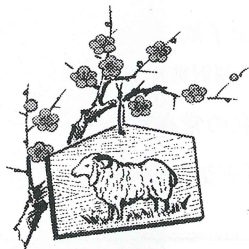




年頭の御挨拶

辰巳会会長 鈴木治雄



新年明けましておめでとうございます。
平成になつてはや十五年、月日の経つのがほんとうに早いものだと痛感いたします。

世界の現状は一昨年の九月十一日の同時多発テロを契機に騒然としたままで、これからどうなっていくのか案じられます。日本国内では景気の動向が論じられて数年を経っていますが、国民のために任に当たっている人々の苦労や国民の困窮に目をくれず、自らの懐を考える一握のグループのためになかなか景気回復せず、むしろ悪化の一途にあるのが現状ではないかと思えます。今日の日本は、一つの目的達成の方策に対し、皆が賛同してやろうとする挙国一致の精神が不足しているように思います。

戦後、教育は自由な発言を認めるようになりましたが、義務と自由が対等である精神が忘れられ、自由に重きをなす昨今にあつて、これからの日本が思いやられます。

一方、世界では、貧富の差が大きく、宗教また民族の対立が大きな問題として発生し、それぞれの主義を強調するあまり、あちらこちらで紛争が絶えず、その上、独裁的支配者と云われる人によって世界の安全が脅かされる様相にあります。

辰巳会会員の皆様には、今年もご健康に留意され、テレビ・新聞報道に関心を持たれ、世間情勢に対処されて、楽しい生活を送られますよう祈念し、年頭のご挨拶とします。

全国大会報告

平成十四年五月二十二日(水)／於：神戸ポートピアホテル「聚景園」

今年の全国大会は、今まで二、三度開催された、お馴染の神戸ポートピアホテル「聚景園」にて、好天の下三十四名のご出席者の方が参加されました。

大会は、正午より柳田幹事の司会で始められ、最初に開会の辞として、安東幹事長の「ビタミンに例えられた、心の修業、健全な経済、健康よりなる三位一体の處世訓」をユーモアたっぷりにご紹介になり、皆様方の笑いを誘われて、会場を沸かされました。

引き続き、鈴木会長より「五月九日に皆様方のご先祖様をお祀りしている祥龍寺にお参りし、幹事一同でご冥福をお祈りして参りました。皆様方ご安心下さい」と優しくお話になり、「こうやって見渡しましてほんとうの辰巳会の現役会員は、先ず居られなくなり二、三世と奥様方で、こう云う会は、どうしても止むを得ない状態、事情で、これ以上のことは、誰がなんとしても出来ないのです、これからは皆様方ご出席して、共に、その子弟、知人で辰巳会への興味の持たれる方をぜひご出席頂く様お願いします。本日は二十四、五名のご出席者と幹事一同で考えておりましたが、三十四名で、久し振りで大勢出席されま

したが、これからも三十名が、四十名、五十名となる様にこの会を仕上げて行きたいと思っております。ただ、古い方が亡くなられ、我々でやらなければなりません、この状態をぜひずっと続けて行かなければなりませんので、皆様方頑張って出席して下さいと共に、遺族の方を紹介され、この会をまだまだ大きくして行く形で進めて行かなければならないと思っておりますので、皆様、健康に充分注意され会にご協力下さい」と、心強いご挨拶がありました。

次いで松下幹事より恒例の会務報告があり「本年は、昨年度中に亡くなられた二名の方の法要合祀を祥龍寺で行なわれた」と、伝えられて、初参加の福井さんのご紹介がありました。

続いて、九十才になられた長老の大谷一二様より、ご長寿の秘訣として「家でじっとしないで、出来るだけ歩き、散歩をしたり、種々な会合に出席したり、食事をお話をしながらゆつくりと、時間をかけて楽しくすること」と、にこやかにご披露になり、力強い発声で乾杯の音頭をとられ和やかな楽しい宴となりました。

宴半でスピーチとして安東さんより年輩者の電話のハプニングをお

木堂 多月得低權

話になられた。そのお話は岡山の「極道会」という会から電話があったとか、安東さんは腑におちないまま、受話器を耳にし、話を伺っている、「極道会」ではなく「木堂会」の聞き違いであったとか、真に恥ずかしいことをしたと、「木堂翁」は気骨の宰相犬養毅翁（号木堂）のことである。

清廉高潔な政治家、憲政の神様として政友会総裁の木堂翁に首相の本命が下った。木堂は蔵相に高橋是清、陸相に荒木貞夫を据え経済の建て直しと満州事変収拾に当たった。

翌年青年将校の一团が首相官邸を襲うことになる。五、一五事件として今日に伝わっている。今の政治家は木堂翁を心して見習ってほしいものであると、又安東さんは老人ともなれば何かと存外な出来ごとがあつて人様に迷惑をかけることが多くなると反省の段をおもしろくお話なされた。

続いて、須藤様より「青い光、赤い光についての進歩した現代のサイエンス」のお話を、最長老の金子貞子様よりは「大極拳による貴重な健康談義」を、坂東様よりは「海外旅行での珍しい体験談」を、松下幹事よりは「出席者の父上方の鈴木時代以降のエピソード」を、夫々、

楽しく愉快にスピーチをされて、皆様方興味深く傾聴されていました。ここで、金子孝蔵様が、粹なしふい小唄を披露され、柳田幹事の名司会と相俟って会場は盛り上がりしました。小唄の余韻を残しながらも、金子峻様より「総合病院でのお仕事上関係深い健康について」の有意義なスピーチを頂き、続いてお元気な松下幹事より、昔歌われていた歌謡曲を披露されたり、日本精化株式会社の社長をしておられた宮永様より「樟脳と金子翁と鈴木商店との深い関係について」のスピーチを頂きました。引き続き、金子翁と同郷の土佐ご出身のユーモアのある須藤様が、「南国土佐を後にして」を皆様とご一緒に唱和されて、会場は沸き立ちました。もし、この情景を天国の金子翁が、ご覧になられたら、無かし喜ばれたことであらましよう。

次いで遠路栃木よりご参加の横田元幹事長よりご丁寧な挨拶と共に、最近の話題とされ「小学生の子供達が基を盛んにしている」との珍しいスピーチを頂きました。

この様にして、楽しかった歓談の時間もあつと云う間に過ぎ、閉会の時間となり、楠瀬幹事の閉会の辞を以って和やかなうちに大会は無事修了しました。最後に記念写真を撮り、再会を楽しみながら散会となりました。なお、本部事務局担当として辰巳会に貢献された川崎雅子様が、この度太陽鋳工株式会社を停年退職され、事務局を去られることになりました。長い間のご苦勞に感謝し、御礼申し上げます。

(S・I記)

平成十四年度 全国大会式次第

平成十四年五月二十二日(水)
神戸ポートピアホテル「聚景園」

司会進行役 柳田 本部幹事

一、開会の辞

安東 幹事長

一、会長挨拶

鈴木 会長

一、会務報告

松下 幹事

宴

一、乾杯

テーブルスピーチ

一、閉会の辞

楠瀬 本部幹事

以上

平成十四年度 全国大会出席者名簿

(敬称略)

平成十四年五月二十二日(水)
神戸ポートピアホテル「聚景園」

足立 せつ	東條 佳子	堀内 昇
安東 浄	楠瀬 正明	松下 重男
安東 恒子	鈴木 治雄	宮永 悠紀雄
今村 三郎	須藤 欽吾	森 好子
大谷 一二	高 明	柳田 辰巳
大谷 淳子	高畑 喜代子	横田 周作
小野 晶子	高畑 笙子	横田 よしこ
小原 秀吉	南条 亮	河野 芳子
金子 孝蔵	山田 和子	(事務局)
金子 ソメエ	坂東 みどり	金野 和夫
金子 貞子	武藤 秋	川崎 雅子
金子 峻	福井 崇子	(以上三十四名)

嗟哉沮洳場
爲我安樂國
豈有他繆巧
陰陽不能賊
顧此耿耿在
仰視浮雲白
悠悠我心悲

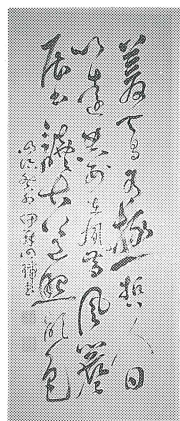
嗟哉 沮洳の場も
我が安樂國と爲る
豈に他の繆巧有らんや
陰陽の賊う能わざるは
此を顧るに耿耿たる在ればなり
仰ぎ視れば浮べる雲は白し
悠悠たるに我が心は悲し

蒼天曷有極
哲人日已遠
典刑在夙昔
風簷展書讀
古道照顏色

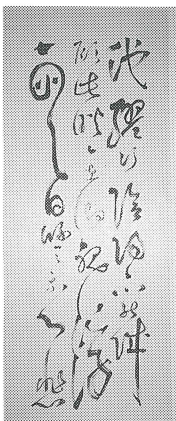
蒼天は曷んぞ極有らん
哲人は日に已に遠けれど
典刑は夙昔に在り
風ふく簷に書を展げて読めば
古の道は顏色を照らす

この拙文は注釈書で無いので詳細の解釈は省略しますが、始めに述べた様に中国の忠節の士が死を顧みず、時を越え古今東西に行動した忠臣の事跡を詩にしたもので、最近リストラなどの理由で落ちている愛社心を憂い、是が高まればと筆を採ったものです。

以上の結論を述べますと、この歌を通じ資源の無い日本では「愛社心を以て頭脳で勝負するより他は無い」と言う小生の自論を照会した次第です。



⑧



⑦

弔 辞

辰巳会本部幹事 故 森 好子 様

森さん、五月二十二日の辰巳会全国大会には、本部幹事として、あれほどお元氣にお世話されていたあなたが、あまりにも急な訃報に、ただ果然自失の思いです。

森さんは、鈴木商店を支えていた支配人西川文蔵さんの三女として、鈴木商店と深くかわってこられました。また、鈴木商店に入られ、後に日商岩井の社長、会長を歴任された、故西川政一さんご夫人はご姉妹にあたられ、西川政一さんは、辰巳会発足から、また東京支部設立にと、辰巳会を盛り立てて下さったお一人です。

森さんは、この様なお関係から、辰巳会の長老として、幹事として、新年例会、秋の例会そして全国大会の開催にご尽力されました。また毎月開かれる幹事会には、欠かさず出席され、いつも笑顔でお話しされていた、あのお姿に、もうお目にかかれないのは、ほんとうに残念でなりません。

辰巳会は、発会から四十年余の間に、鈴木商店に直接関係した会員のほとんどが故人になられ、今は、故人の関係の方、鈴木商店ゆかりの方々によって、辰巳会が盛り立てられています。森さん、辰巳会が鈴木商店にかかわる方々の絆として、鈴木商店を後世に伝える会として、その志を消すことなく、これからも続けていくことを、お約束します。

森さん、あなたは辰巳会を愛し、永い間一生懸命支えて下さいました。

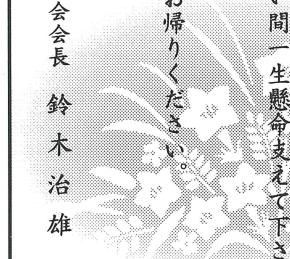
ありがとうございました。

どうか、心安らかに、神のおそばにお帰りください。

森さん、さようなら。

平成十四年六月四日

辰巳会会長 鈴木治雄



辰巳会 だより

本部 新年例会

平成十四年十月二十四日、快晴であつた。今日の会場は観光船ルミナス神戸2船内「サールドメー ルAデッキ」にて会食しながら、明石海峡大橋を眺望する船旅の秋季例会。

本部 秋季例会

平成十四年度 辰巳会
新年例会出席者名簿
平成十四年一月十八日(金)
於「神戸」第一樓

(敬称略)

安東 浄	鈴木 治雄
安東 恒子	須藤 欽吾
今村 三郎	高 明
王 延子	南 条 亮
大谷 一子	坂 東 みどり
大谷 淳子	武 藤 秋
大塚 融	堀 内 昇
小野 晶子	牧 冬 彦
小原 秀吉	松 下 重 男
金子 孝蔵	森 好 子
金子 ソメエ	柳 田 辰 巳
金子 貞子	(事務局)
金子 貞子	金 野 和 夫
東 條 佳 子	川 崎 雅 子
楠 正 明	以上二十八名

神戸元町・中突堤界限：

辰巳会となるとどうしても古い時期が頭をよぎる。戦前戦後を通しての私の古戦場？、西村蘭香堂(薬局)、丸善(本屋)、ちよつと行くと南京市場。今でも有名な豚マンの店あり。

二丁目には藤はら(天ぶら、高畑誠一翁のお好み)、三丁目には美田時計店、高砂屋、風月堂、青辰(あなご寿司)、青葉(うなぎ、吉兆の前身)。山側には時雨茶屋(和食、地震後はなし)、北へ一寸入るとキャビン(洋食、金子翁の秘書であつた日塩元社長の安東直市氏が若手用に愛した店)、元町



通りに帰ると播新(骨董店)。西にちよつと行き浜側に入ると当時時雨茶屋の出店のような『玉寿司』という小料理屋があつた。金子直吉翁はこの鯛茶漬をこよなく愛されました。元町三丁目を過ぎると中突堤へ下るタワーロードとなる。

時間に余裕あり、ゆっくり歩く。海岸通りからは陸橋の歩道で、そのままポートタワーまで行ける。右下には昔からの旅客ターミナル(淡路島、小豆島、四国行き等)がある。左へ中突堤を渡りメリケ

ンパークへ寄った。ホテルオークラの高いビルを目にし手前を歩くと、大きな船があつた。よく見るとジェット噴射エンジンの艇で長さ二、三〇メートル位か、浮ドックにある様な状態で底まで見られる。その横にちよつと小さいものがあり、もう一隻木造の古い時代の帆船らしきものがあつた。勿論、皆廃船である。

まだ集合まで時間あり、ボートと海を眺めていた。『もしもし』という声があった。びっくりして振り返ると女学生がいた。『写真をお願い！』本当に何十年振りかのようないきいきと声が出なかつた。よく見ると三人連れである。カメラを出された。小さな軽いものであつた。今流行の使い捨てのものであらう。何十年もカメラを持たない主義、しかし昔とった杵柄、何をと構える。余り軽過ぎ足もよろつく。後ろを見ると塀と柵がありちよつと腰をかけることが出来た。いよいよ脇をしめ呼吸を止めファインダーを覗く。これぞ

合法的？じっくりと見られる。脳に電波が走ったような気がした。三人とも髪は真っ黒、濃紺のセーラー服、靴下は真っ白、但しダブダブの太いもの、靴は黒と何か気持ちよい嬉しい瞬間であつた。『暗夜に霜が置く如く』を思い出し、シャッターを切った。つい声

平成十四年度 秋季例会

出席者名簿

平成十四年十月二十四日(木)
観光船 ルミナス神戸2
(敬称略)

安東 浄	東 條 佳子
安東 恒子	楠 瀬 正明
今村 三郎	鈴木 治雄
大谷 一二	須藤 欽吾
大谷 淳子	高畑 宗一
大塚 融	高畑 美紀
藤本 敏之	坂東 みどり
小野 晶子	武藤 秋
小原 多喜子	松下 重男
小原 秀吉	宮 永 悠紀雄
釜崎 とし子	柳田 辰巳
金子 孝藏	(事務局)
金子 ソメエ	金 野 和夫
金子 峻	中 谷 尚美
金子 泰	以上二十八名

が出た。『どちらから。』『岐阜です。』『ほう、夕べはホテル？』『いえ今朝出ました。』『あつ、そう。』頓狂な声となった。自分の今朝西宮を出たこと、岐阜との差を！やはり年を感じた。楽しく別れ、ターミナルへ向かう。階段を登り入るとホテルのロビーがあつた。まだまだ時間があリソファを拝借する。落ち着くとさっきの事が思い出され、もう二、三〇分彼女達と話せばよかったと残念。惜しい事をしたと欲張りの気持ちが溢れてきた。ルミナス神戸2船上にて：いよいよ一階下の中突堤旅客ターミナル2階(切符売場)に向かう。広い場所に四、五名位の人しかいない。切符売場らしきところで辰巳会本部の案内書を出し確かめた。確認がとれ前の席に掛けることが出来た。十一時過ぎ、トップで小野幹事が見えた。それからぞくぞくと集

まっていえた。集合時間の終わり頃、ご夫婦の方が見え、実はポータワーの所の発着場へタクシーで行き降りたが、間違ひであつたので徒歩で来たので遅くなった由。足が悪い方だったので三〇〇メートルの所であつたが大変だつたとお話があつた。案内状については、発送前の幹事会で『百尺竿頭に一步を進め』と、そこ迄は思いながら決定した案内書、略図等をお送りしたのにかかる結果が出るとは不運としか言いようがなかった。二〇分前乗船。十二時五〇分発、観光船ルミナス神戸2に乗る。明石海峡周遊が目的である。サールドメールの豪華なテーブルに着席。各テーブルでは会話が楽しく始まっている。ふと見ると窓外の建物が動いている。ちよつとビックリ。こちらが動いているのだ。全然エンジンジンの音も聞こえない。総トン数四七七八トン、定員一〇〇〇名(今日は三〇〇名迄の乗客であつたと思われまふ)の大きさのせい

かも知れません。時はよしと柳田幹事が発会のリードをされる。まず鈴木会長の挨拶を司会。会長は病後ながらお元気な立ち、本日の好天気を感謝し皆様のご出席を寿ぎ、気候的に紅葉の時より早く、移動しない、年齢相応な会合の計画、即ちクルージングになった次第をご披露なさつた。続いて乾杯は、本日の最長老九〇歳の大谷一二氏が凛々しい姿勢を以って元気よく、辰巳会全員の健勝を願つて盃を乾された。料理はシェフ自慢の懐石風フランス料理。前菜は海の幸カクテル、鰯のマリネ、スープ、秋鮭のアーモンド焼き、牛フィレスステーキ、デザート、コーヒー等々。珍味ずらりの日仏料理法破壊というか、これをお箸で頂く次第です。湾外に出ると遠くは関西空港、近くは南に淡路島、北は神戸西部の須磨一の谷古戦場、秋風薫る絶好のクルーズである。料理と会話が弾み時のたつのが

早い。ふと教えられ上方を見ると迫力ある明石海峡大橋が真上にある。その圧巻に感動する。

古い関係会社の方と戦後から十五年の懐古となると、いつ迄たつても話につきない。その方だけで全行程を話し続けてしまった。親しい有志の方だけでも思つても時間が全然足りない。会合とはこんなものか！宴なかば、本日の初参加の藤本敏之氏にスピーチをお願いした。

私(藤本)が日経新聞、大阪経済部記者として高畑誠一氏の『私の履歴書』を担当したのは昭和四十七年である。この掲載は現在も同じスタイルで朝刊最終面に連載されている。同氏が登場したのは十月で三一回分だつた。同氏のこと、鈴木商店のことについては、ここのご出席の皆様の方がはるかに詳しいと思うので、あえて申し上げることはない。ただ鈴木商店に縁のある皆様方を前にして強く感じることは、不幸にして金融面

で行き詰まった点を別にして良く人材を育て、結果、日商岩井、帝人、神戸製鋼所などの企業群が育ち、今に残っていることだ。記事の中で直裁的な表現で触れていないが、日商岩井でも高畑氏が人材育成に特に気を配っていた点が強印象に残っている。『社員がミスをした時も厳しく反省を求め、失敗をテコとして成長してもらうように心を配った。』という同氏の言葉を今もハッキリ覚えている。以上の様なスピーチを頂いた。著者の経験でも高畑翁は常に努力をモットーとし、一番を目指せ、人の倍働け、等々。時には出社前、退社後、自宅に寄る制度があつた。ゴルフ場においてもルール、エチケットについては完璧を期す剛の方であつた。宴も終了。柳田幹事の誘導で写真撮影となつた。いつもの通り金野事務局長により別掲のような見事な作品が出来た。最後に安東幹



東京支部 新年例会

今年の東京支部新年例会は一月二十四日『つきち田村』で開かれました。毎年、新年会は「築地ス

事長より閉会を宣せられた。窓外には川崎造船所のドックが見え、船はすべる様に岸壁に近づき見事に停止した。時は十五時十分。これで楽しい秋季例会の一日は終わり再会を約し、三々五々自由解散となつた。(S・M記)

エヒロ」でと長い間、決まった所で行われて来たのですが、スエヒロが築地店を閉めてしまった為との話でした。あのビフテキには多くのファンがあつたはずですが、そんな所でも店仕舞いをしてしまふ落ちつかない世の中になつたものです。さて、『つきち田村』は築地本願寺の斜め向かいをちよつと入ったところにあり、ここも老舗の懐石料理のお店。仲居さんの笑顔に迎えられると、四階の会場へ招じ上げられると、既に『かね辰』の暖簾も飾りつけられており、定刻すこし前にご参加の十二名全員お揃いになつたところで、記念写真をとってもらいました。次いで支部長の荒木様のご挨拶があり、昨今の経済情勢は鈴木商店が行き詰まった昭和初期のものと一脈通じ合うものがあり、本日は公務のため欠席の前支部長の速水優様が日銀総裁としてこの難局の打開にご苦勞なされていることに因縁のようなもの感じておら

れること、また今こそ、苦難を乗り越えて多くの立派な事業を残された鈴木商店関連の先輩方の智慧と努力に学ぶべきことが多々あることなど述べられました。

続いて、事務局から会員の拓山寿郎様が昨年七月、めでたく満百歳をお迎えになったと報告があり、その後、物故者の方々に對し全員で黙祷を捧げました。

木村隆昭様の力強い乾杯のご発声で宴会ははじまり、料理が運びこまれ、お酒が酌み交わされる中で、初参加の住田正二様がお父様（正一様、東京都副知事や石川播磨工業の前身である呉造船所社長などを歴任されたお方）から鈴木翁とご一緒に東京へ出張されたがその際、定宿の東京ステーションホテルの二階にあった直吉翁の部屋にはよく政財界の大立者が尋ねて来たとお聞きになっていること、また、お父様は忙しいお勤めの傍ら海運、造船に関する論文や隨筆、經濟評論などを数多く残されたこ

平成十四年度 辰巳会 東京支部 新年例会参加者

平成十四年一月二十四日(木)
於・つきぢ田村
(順不同・敬称略)

荒木正雄	住田正二
安東 淨	池田宗吉
木村隆昭	西川明子
山野上 光	森 美子
移川 中	長橋 忠男
ご夫人	荒木義弘
参加者十二名	

とや、古瓦や古書の収集と研究がお好きで由緒のあるものを随分集められたことなどをお話になられた。続いてこちらも初参加の山野上光様からお父様が神戸製鋼所の創生期に田宮嘉衛門氏を補佐し活躍されたことなどお話されました。移川様、木村様などからも、それぞれお父様の鈴木商店時代の精励ぶりが偲ばれるお話が出され、更に幹事長安東様から住田正一様が辰巳会の発足に力を尽くされたお方であることを披露されました。デザートが出されたところで、森美子様からご主人（元日商岩井

東京支部 秋の例会

木枯らし一号も近いかと思わせる少々冷たい風を感じながらも雲一つない快晴、正に辰巳会日和。今日の例会の会場は一昨年春の会場と同じ東京芝白金台の八芳園・壺中庵。一昨年秋に開通、開業した営団地下鉄「白金台」駅より徒歩一分、アクセスが格段によくなった。

長の挨拶の後、木村隆昭の発声で、辰巳会と会員皆さんの益々の御繁栄と御健康を祈念し乾杯、美味なホテル自慢の料理を堪能しながら、夫々持ち寄りの話題や最近世上を沸かせた藩陽事件、又日夜テレビ釘付けのサッカーワールドカップ熱戦等賑やかに歓談、最後にレスラン中央に陣取って記念撮影、午後二時前に又の再会を期して解散となりました。(T・K記)

平成十四年度 辰巳会 東京支部 秋の例会参加者

平成十四年十月三十日(木)
於・東京港区芝白金台
「八芳園 壺中庵」
(順不同・敬称略)

荒木正雄	池田宗吉
安東 淨	西川明子
木村隆昭	森 美子
山野上 光	長橋 忠男
移川 京子	横田 周作
前川 滋郎	武岡 輝彦
建部 清也	荒木義弘
住田 正二	
参加者十六名	

副社長）が海外勤務続きであったため、お子様は現在みなさん海外住まいだが、その一人が昨年末、女性ではじめてハーバード大学建築デザイン大学院の教授陣の最高責任者（チエアー）に指名されたこと、これも古くから世界に雄飛した鈴木商店の流れに乗せていただいたお陰ですとおっしゃいました。

このように和気あいあいの中、今年も予定の時々は瞬間に過ぎ、最後にいつも通り福砂屋のカステラをお土産に頂戴し散会となりました。今年も例年通り、日本発条様、帝人様からはそれぞれ結構な記念品を、また、日商岩井様からは協賛金をご提供いただきました。関係の皆様のご懇情に對し厚く御礼申しあげます。(Y・A記)

東京支部 春の例会

家々の庭先に、観光地や公園の植え込みに、初夏を彩り静かに微笑みかける。あじさいが道行く人

自然を残す回遊式庭園は都心屈指の名園として知られている。荘重な山門を思わせる堂々たる門をくぐり四、五十メートル行くと壺中庵玄関、流石に久原氏が和風建築の粋を凝らした数寄屋造りの建物の清められた広々とした玄関に入ると気分もホッと落ち着く。

開始予定正午の三十分程前には十名程の皆さんが見えられ、お茶のサービスをいただきながら口ビーで談笑、早く到着されて早や

の目を楽しませてくれる今日この頃ですが、方や全世界津々浦々を興奮に巻き込むサッカーワールドカップ杯競技熱戦の最中、六月六日正午から、辰巳会東京支部春の例会が、戦後より私共に馴染み深い皇居前パレスホテルで催されました。

会場の十階からは、静寂の中に新緑に包まれた西丸皇居岩殿、宮内庁、二重橋や東御苑が望められ、落ち着いた雰囲気のカラウンレストランで、洒落たフランス料理を満喫しながら夫々の日ごろの話題で歓談を楽しみました。

出席者（敬称略）は神戸から栃木に転居された、横田周作氏を始め荒木正雄支部長他長橋忠男、安東 淨、荒木義弘に住田正二、建部清也夫妻、池田宗吉、西川明子、森美子、今村三郎、山野上光、木村隆昭の十四名でした。

今回は特に見学会などの行事、テーマありませんでしたので、安東、荒木義弘、両幹事の司会で、荒木正雄支部長と横田前本部幹事

庭園を散策された方もおられた様子。

皆さんお揃いになったところで玄関の畳敷き広間で記念撮影の後、会場となる部屋に案内される。前回と同じ歴史を感じさせる落ち着いた和洋折衷の部屋で本日の参加者十六名で丁度定員となる格好の広さ、皆さん着席し、予定の正午となり荒木（義）幹事の司会で始まり、開宴前に本月初めて参加された武岡輝彦さん、前川滋郎さんの紹介、そしてお二方の自己紹介がありました。

武岡輝彦さん
父上は高畑、永井さんと神戸高商同期で鈴木商店がフランスのクロード式空中窒素固定法の特許を買い取って大正十一年に設立したクロード式窒素工業（のちの東洋高圧→三井東圧化学の源流）を設立、金子直吉さんの招請をうけてその工場を主導された方で、武岡さんはご子息と共に現在鉄工業を經營されておられる由。

前川滋郎さん

帝人の副社長を経て帝人精機の社長をつとめられ、帝人ご在職中昭和三十年代初め、米国駐在を命ぜられ、当時米国での活動には商社員の資格が必要（有利）だったので日商社員となり五年間在米経験がある。だから日商岩井とはインテンショナルでない縁ということになる。奥様は鈴木治雄会長のご令妹。

お二人の若々しいお元気な自己紹介のお話のあと荒木正雄支部長のご挨拶、続いて池田宗吉さんのご発声で乾杯をして宴に入りました。ビール、お酒を酌み交わしながら壺中庵自慢の日本料理、見事な盛り付けに箸を運びながら博識博学の武岡、前川両長老論客を迎えて戦時中の従軍談、戦争体験やら経済金融、社会情勢などいろいろな話題が途切れることなく、それは賑やかに盛り上がり、あっという間に予定の二時、荒木幹事からこれからも皆さんお元気で例会に参加されますようと閉会の言

葉でお開きとなり、皆さん銘菓

「壺中庵吉珠最中」のお土産を手にして再会を約して解散しました。

庭園は樹種にもよるのか紅葉の気配は見られず人影も少なく静かで緑一色、小径の傍らに赤松、黒松、蝦夷松等の見事な盆栽鉢植えが二十鉢位並べられている。鉢に添えられた札には樹齢八十年から中には五百年と記されているものも数鉢見られる。どんな人が育て始めたのかと思いを馳せる。細い径をおり池のほとりをゆつくり歩きながら暫し庭園散策を楽しんで帰路につきました。

(N)



辰巳会 会員だより

小野 晶子

次は来月七日の金曜日ね

森さんのご逝去のお知らせを受け、ほんとうにびっくりして言葉も出ませんでした。あんなにお元気だったのに！

五月二十二日、神戸ポートピアホテルにて全国大会が開催され、受付を共にお手伝い致しました。皆さんと楽しそうにお話なさった

り、色々とお心配り等なさっておられました。

会も盛会で無事に終り、「お疲れ様でした。次は来月七日金曜日ね」と、確め合ってお別れした許りでした。これが永久のお別れになろうとは、誰が予測致ししょう。

六月七日の幹事会、何時も二人並んでいますのに、今日はおられません。でも、「お早うございます。」と、お元気なお声が聞こえて来るような気がして、心にポッ

カリ穴が開いたようで淋しくな

りません。当日は、庭の紫陽花の花を切り、アルバムのからお優しくほ笑んでおられるお写真を切り抜き、小さな額縁に入れてお席に飾り、ご冥福をお祈り致しました。幹事をご一緒に仰せつかつて十有余年。言葉では言い尽くせぬ程、お世話様になり、お導き頂きました心より感謝致します。

辰巳会をこよなく愛され、ご家族思いの方でした。おしゃれで明るく、ユーモアたっぷり、一緒にいると、心温まる思いが致しました。クリスマスチャンでいらした森さんは、神と人に愛され、世の為、人の為にご奉仕され、天国の幸いに預けられました。魂の平安とご遺族様の上に、神様のお恵みとお守りが豊かにありますように心からお祈り申し上げます。

柘山 寿郎

謹啓 春寒の候、益々ご健勝のこととお喜び申し上げます。

さて、この度は寿郎長寿祝いと

して、大変きれいなお花をご恵送賜り誠に有難うございました。

本人は年齢から来る衰えはございますが、体調には問題なく元気にしておりますので、会員の皆様によりしくお伝えいただければ幸いに存じます。

略儀ながら、書中をもってお礼申し上げます。

平成十四年二月

謹啓 薫風の候 貴台におかれましては益々ご健勝のこととお喜び申し上げます

さて この度の故 拓山壽郎儀告別式並びに偲ぶ会に際しましては 丁重なるご弔慰を霊前に賜りまして衷心より感謝申し上げますと共に生前のご厚誼を深謝申し上げます

お蔭様をもちまして 告別式並びに偲ぶ会はずが無く執り行うことができましたことを 重ねて御礼申し上げます

本来であれば お伺いし御礼申しあげるべく処でございますが

略儀ながら書中を以って御礼の御挨拶を申し上げます 敬具

平成十四年五月

故拓山壽郎儀告別式
偲ぶ会葬儀委員長

秦野商工会議所 会頭 宇山忠男

喪主 拓山和昭

辰巳会会長

鈴木 治雄様

藤野 欽司

「たつみ」編集部御中

今年の夏はいつまでも暑く参りました。それでも、私たちが勤めている時代と違って今の若い人は大変だろうと、ボランティアに精を出しております。

私の父は加古郡野添の庄屋の出身で、よくある親戚への連帯保証から没落し、一家離散の運命に会い長男として本家再興のため必死の努力をしたことが遺された履歴書からも読み取れます。三年間の神戸市書記から二十二才で横浜の神栄(株)に就職、さらに七年間勤めその間給与、賞与も順調に昇給し

ているにも拘わらず三十才で、神栄の初任給で鈴木商店に変わって

います。この間に何があったのでしょうか、今となっては知る由も

ありませんが、推測では当時、神栄は生糸の輸出市場を神戸にも開設したいという意図から設立されたのですが、糸価の激しい変動から浮沈を繰り返して、結果的には生糸業務は横浜を中心として順調に伸びていたのです(神栄百年史より)。

しかし、その年十月、父は母を失い失意のうちに退職して故郷に帰りましたが、そこで鈴木商店本店役員の日野誠義の知遇を得たのではないのでしょうか。

ここから何が読み取れるのでしょうか。青年の本家再興への努力は母を失ったことにより一旦挫折しましたが、そこに給与は安くとも将来を託せる前途ある鈴木商店が現れたのではないのでしょうか、さらに、これを結び付けた人との繋がりがあったのではないかと思えます。鈴木商店入社後は父の暮らしは順調に推移し、兄弟で故郷に父

母の墓を建立し文字通り故郷に錦を飾ることができました。一枚の下書きの履歴書は多くの事柄を語っているようです。

*父は鈴木商店倒産後は帝国炭業の業務を譲り受け、戦時中の企業統合を期に廃業しましたが、戦後は友人と「富士石炭」を再興したものの失意のうちに八十二才で亡くなりました。没後この履歴書にある大正二年から倒産までの事情が不明で、昭和六十二年「辰巳会」があるのを知り、松下重男様のお手を煩わし昭和式年表月発行の住所録で在籍は判明したものの、当時の在籍者の方に連絡を取って頂きましたが、残念ながら時すでに遅く詳細は不明でした。最後に辰巳会の会員の皆様のご自愛をお祈り致します。

平成十四年九月十二日